女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾八號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 178. SEPTEMBER 7TH, 1889.

第百七十八號目錄

EDITORIAL:—Patriotism.

LEADING ARTICLE:—How to Read Novels.

CRITICAL NOTES:—"Women of Japan and of the West." "The Woman's Duties." "The Mother's Duties."

MISCELLANEOUS:—Thinking of Home. Difficulties of Marrying. Beauties of Artlessness. Masterpiece of Teikakyo. Four Great Works. First Productions.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

HISTORICAL RECREATIONS:—Charles Dickens. (concluded).

NOVEL:—"Mind and Heart."

OPEN LETTER.

GENERAL NEWS.

FOREIGN NEWS.

社說 愛國の情

論說 小說を讀む者の心得(樂山生)。

批評 我國婦女子の地位改良を論じ併せて歐米婦人女子の狀態に論及す○女子之務○はゝのつとめ。

雜錄 古鄕を懷ふの感○婚事尤も難し○天眞爛熳○家定卿秀逸○脫胎の四大奇書○少壯の作。

笑草 何節も聞あきたとは○甑は番人○孔明の智慧○石橋がお前丸出し。

兒籃 駱駝乘アリーの話し。

史傳 チャアレス、ヂッケンス傳(完)。

小說 冷熱記第四章(夜の露)。

開書 殿本の君及び四方の人々に尋ね參らす(ちゆき)。

寄書 誤り易き言語(依田雄甫)

新報 慈善救濟○年中の勉强時○小野小町一千年祭○佳人の擊劍。

片々 婦人衛生會○靜寬院宮○普通土女學校○支那人○改正中止及一夫一婦に於ける女流の建白○名古屋の賦金○上州岩鼻婦人積德會○同上毛婦人協會○裁縫○外人の義氣○大坂の女子教育○ジョンソン孃。

外報 レビット夫人○盲女○劇場の子供○毒婦○ラマバイ、

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Komachi ranks among the six great poets of Japan, and belongs to the ninth century. Her admirers are planning a celebration of the 1000th year of her birth. Murasaki Shikibu and Sei-shōnagon, two great figures in literature of their sex, belonging respectively to the tenth and the eleventh centuries, will, we suppose, be commemorated in their turn.*

(2) *Here is an argument against the alledged supposition that women are not fitted for manufactory work in the fact that there are about 8 per cent. preponderance of patients among the male hands compared with those in the female in the Oji Paper Manufactory.*

(3) *H.I.M. the Empress has conferred yen 300 toward the sufferers from flood in Nara Pref.*

(4) *Miss Mine Mizuno, formerly a teacher in the Azabu School, has responded to an urgent invitation to engage in the work of Kōtō Jogakko.*

(5) *An Orphan Asylum is being instituted in Hiramatsu, Chikuzen. It is to be conducted by four private gentlemen.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十八號
明治二十二年九月七日發兌

社説

○愛國之情

第一 愛國者

假令左したる人物にあらずとも、其人國を愛すと聞けば、何となく奥床し、吾人古今の史傳を讀みて、感涕腸を斷つ如く思ふは即はち、國家危急の秋に際し愛國者の困苦窮迫したるの事跡に在り。思ふに所云る愛國者なるものゝ中にも、素より無智短才の人少なきにあらじ、假りに之をして尋常凡躰の俗人にてあらしめば、彼れ恐らくは何人の注意をも惹くと能わずありつらんに、幸にして一度び愛國者なりと評定せらるゝに至り、天下翕然として之を敬愛し、則はち彼を崇めて一種高等なる武士にてもある如くに見做したり。

左れば之に反し、彼の識高く才鋭どきの人と云へども、若し只だ衣食に奔走し、自巳の榮利に眩めき、旦暮の事業寧ろ一身の益を計るに過ぎずんば、世は假令ひ何如に功利の淵に沈むと雖ども、倘必らずや決して之を尊崇するとなけん、蓋し之を用ゆるともあらん、又之を恐るゝともあらん、然れども彼の愛國者に於ける如くに、之に對して一種の敬愛を寄するとあらず。

吾人謹んで感謝す、彼の愛國者の我日本國に敬愛せらるゝ特に尤も切なるを感謝す、家門天に達くと云へども其内若し之を愛するの人なくば茅屋にだも及ばず、國土たとひ全地に渡ると云へども其内若し愛國者なくんば民なきに均し、愛國者は蓋し一國の眞の國民也、寧ろ國民中の精神也、守護神也。紂王に億の民あり、然れども億の民若し悉とく殷を愛せずんば殷すでに國なし、文王に臣多からず、然れども天下の人若し悉とく周を懷はゞ周すでに天下を受たり、一國の貧富生死は愛國者の有無存滅に由る。

第二 愛

何如に冷酷の人物なりとも、其の玉兒の爲めに涙を墜さずと云ふとなし、他人の憐れを見て衷心ひそかに感ぜずと云ふとなし、之を人間通有の愛情と云ふ、此情發しては親子父兄の間を固め、密みては戀夫佳人の交わりを結ぶ、稱して孝と云ひ、慈と云ひ、悌と云ひ、戀と云へど、之を極むるときは皆な普通同體の愛情にあらぬはなし。

然らば此の愛情は何に由りて起れると問ふに、或人は之を解

して利己心の發達したるものと云へり、即はち初めは已に感ずるの樂しみによりて人の樂しみを推知し、又人の樂しみを爲すとの遂に己の利たるとを承知したるが、其經驗次第に重なりて第二の天性と爲り、遂に不知不識の間だに己を棄て丶人に利せんとするに至り、更に進みては如此くするとの必らず爲さゞる可らざるの義務たるとを覺ゆるに至り、今や純然たる自然の人情となりて萬人之を疑がわざるに至る。然れども其由來する所ろを考ふれば全く是れ利己心に發す、全身を殺ろして子を助くるの母の愛情も、一身を棄て丶國家に犠牲たるの愛國心も、皆な一變したる利己の念のみ。誰か己を利せずと云ふ、滔々たる天下の至善至美なる人性も其源を窮むるときは同じく利根あらざるはなし、賄賂を取るもの果して卑しむべきか、之を彈劾するの輿論果して正しきか、彼の哲學の解によれば前後に左したる懸隔を見ず。

如此く人性を解するは人を豚にするもの也、人を犬の如くに見るものなりとて、古來大ひに憤どふりて反論するもの亦た少なしとせず、吾人も亦た多少之に同意して寧しろ彼の冷眼ある解剖學者を退くるものなれども、然れども如此き由來論の一勝一敗に由り、直ちに用ひて即今の道德を左右せんとするに至りては喫驚に堪へず。抑そも物の由來如何に至りては天地間未だ一物として能く研究し盡されたるものなし、現に吾人が斯の如く生存するの生子は果して何如にして成れるかと云ふと、何如なる生物學者と云へども今日尙ほ之を明斷するを得じ、然れども其生子の由來の何如あらんかは、敢て吾人が現在の生死に關せざるに非ずや。

故に愛情は抑そも何如にして成れるか、吾も人も未だ之を知らず、たとひ忽如として天より玉の如くに恩賜せられたりとするも、若しくは下賤醜惡なる貪慾の念發達して遂に如此く進化したりとするも、其の論定によりて、現に愛情なるもの丶正に方今の如くあるを尊卑するに足らず。人は果して土より化したるものか、然れども今日の土と人とを見て之を同等なりとするものなけん、人は果して猿猴と祖を同ふするものか、然れども今日の猿猴と人間とを見て之を同類なりとするものなけん、土は混然として土、猿は猾焉として猿、人は仁々として人なり。如此く愛情は即はち愛情にして、喩へば秀吉は嘗て藤吉郎なりしが故に關白たるとを得ざるとなく、クリストは嘗て乙女の子なりしが故に神子たるとを得ざるとなきが如し。

左らば愛情の性たる果して何如ん、曰く愛情は自利を棄て他利を計らんとするもの也、たとひ此他利心は元の自利心たりしと否とに關せず、今に於ける其の性を見るに純乎たる他利の念なり。玆に親あり、只だ其子の報ひんとを欲して之を愛せば何如ん、又た妻あり、只だ其夫に顧みられんとを願ひて之れに仕へなば何如ん、又た友人あり、只だ其の友の己を助けんとを望みて親睦せば何如ん、蓋し何人と雖ども、如此きを以て眞正なる親の愛、夫婦の愛、友人の愛なりとするものなけん。彼等先づ己を忘れざる可らず、更に可なるは全く他を思わざる可らず、最とも宜しきものは犧牲献身して他の爲に死するに至らざる可らず、此に至りて愛其の愛を極めたりと云ふべし。彼の己を愛するものを愛するは報ゆるに過ず、稅吏と云へども倘ほ之を能くすべし、眞正の愛に至りては即はち敵を愛するなり、己を益せざるもの、己に逆らふものを愛するにあり、而して此の愛なくんば人の尤も至聖なる事業を爲すに足らず、人の尤も至高なる感服を受るに堪へず、以て至聖至高なる愛念の實に人の至情たるを知るべし。假令ひ我れ諸の人の言ば及び天の使の言ばを語るとも、若し愛なくば鳴銅や響く鐃の如し、假令ひ我れわが惣ての所有を施こし、又焚る丶爲めに我が身を予るとも、若し愛なくば我に益なし、愛は己の利を求めず、人の益を圖るものなり、妬むとなく、怒るとなく、誇るとなく、只だ人の爲めに盡さんと欲するもの也。

第三　愛國の情は自利の情なり

所云る愛なるものは己を忘れて人を益するにあり、即はち自利の念を棄て丶專ぱら他利の事を計るにあるなり。去らば己を愛するの愛は均しく之を愛と稱すと云へども、其意義に於て既に眞正の愛に同じきを得ず、例へば與ふるとを以て愛ありとせば取るとを以て同一の愛なりとするを得ず、惠むとを以て愛なりとせば奪ふとを以て同一の愛なりとするを得ず、故に他利を主とするの愛を以て、自利を專ぱらにするの愛に均しうするを得ず。所云る眞の愛なるものは先づ他を思ふにあり、世俗の己を愛すと云ふものは即はち先づ己を思ふにあり、之を以て己を愛するは愛にあらず利己のみ、彼れたとひ愛の祖先たりしとあらんとするも直に方今の愛たるを得ず、方今の愛は即はち純然たる他利の念にてある也。愛すでに自利にあらず、然らば愛國心は果して自利の念にあらざるか。若し只だ一身を愛するの愛を以て彼の卑しむべき

の利己心なりとせば、一身を棄てゝ一國を愛するは豈賞むべきの大ひなる他利心にあらずや。然れども万邦連立し、國と國と相ひ競走するの日に於て、われは即はち自國を愛して他國を思はずと云ふに至りては、未だ必らずしも純然たる他利心にあらじ、此點に據りて觀來れば、愛國の念亦必らずしも利己ならざるにあらず。吾人愛國心の性質に於て惑ふと少なからず、是れ果して自利利他を半ばするの情か、左らば特更に愛すべき處ろなし、是れ果して一種の自利心なりや、左らば安んぞ彼の愛國者なるものを賞するに足らん。

第四　國歌多くは醜聲

愛國心の清濁何如んに就きては吾人未だ之を辨ぜず、然れども其の發する所ろに就きて之を考ふるに、愛國心は寧しろ一種の大ひなる自利心の如し。吾人必らずしも總べての愛國心を擧げて悉とく然りと云はず、但だ其の最とも多くの愛國心の實に自利心の氣味を混ずる甚多なるを信ずる也。夫れ詩歌は人の情を吐露するの尤も力あるものなり、而して詩人の詩歌は其國人中の尤も公平なる感情を代表するものあり。然れども如此き詩人が吟ずる所ろにして更に各國民夫々の至大なる同感に合し、遂に稱して國歌と云へるものとなれるを見るに、其辭は大率ね卑くし。

米人サミウル、スミスが「亞米利加」の詩を賦するや云く、

音樂をして風に響き、萬づの樹々より自由の歌を歌はしめよ、万人異口音をそろへ、息あるものは聲をあはせ、千々の巖ほも口を開けて、皆一齊に歌を歌へよ。
自由の造り主、われらが父、汝ぢ御神に歌うなり、わが國長しへに自由の光にて輝やき、君が御力にて護られなん、大ひなる神よ、われらが王よ。

而して、英人ヘンレー、ケレーの「國王万歳」を吟ずるや云く、

主よ、神よ、起王へ、わが王の敵を散らし、倒れしめ、其の政事を亂れしめ、其計事を破れしめよ、吾等が望みは王の上にあり、神よ吾等すべてを惠み玉へ。
最と善き寶の御庫開きて、君が惠みを王の上に注がせ玉へ、王をして長く治めしめ、法律を保護せしめ、われに心を盡し聲を張りて、神よ王を助けよと歌はしめ玉へ。

米人の歌うときは彼が如く、英人の歌うときは此の如し、而して獨逸人のライン河を詠ずるや亦た頗ぶる敵愾の氣あり、カール、ウイルヘルムの作に云く、

一滴の血温たかく動き、一肢の腕劔を揮るひ、隻手尙は

ライフルを保たん間だ、何如なる敵も境を越へじ。
盟ひは應へ、波は響き、旗は朝日にひらめけり、ライン河、ライン河、日耳曼のライン河、われら汝ぢを衛らん、吾國の河。

獨逸人既に如此く歌ふときは、佛蘭人亦た安きを得ず、ローゲ、ヂウ、リスル則はちマーゼールを歌つて云ふ、

起てよ佛蘭人、榮えに目覺め、きけ、きけ、たれか汝ぢを起こせし、汝ぢが子、汝ぢが妻、白髮の老人なり、彼等が落す涙を見、彼等が叫ぶ泣きを聞け、彼等が涙を見、彼等が泣きを聞け、暴君害を釀もして、雇へる魔兵を命じ、吾等が國を驚ろかし荒らし、平和と自由は血に塗れて横たわる、よろへ、よろへ、汝ぢ勇悍の人、仇かへす劔を拔きて、進め、進め、万人一つに語らひて、勝たずば死せんと定めつれ。

大凡そ各國民それ〴〵の大喝采を博するの歌は大率ね斯の如し、之れ深く自國と外國とを區別し、吾を重んじて彼を輕ろしみ、吾を尊とみて彼を卑しみ、或は吾の勇猛は万國に秀づと誇り、或は何如なる敵もわれには勝ち得まじと慷慨し、甚たく殺氣を吐きて所云る愛國の情を呼起す也。思ふに如此くあれば愛國心はたゞ己を大にして他を小にし、己を益して他を害するに在り、卽はち眞正の愛に非ず、只だ一種の自利心に過ぎざる也、

第五　獨立、連交

愛國心果して一種の自利心たり、然らば則はち惣べての愛國心は遂に人情の善美公平なるものにあらざるか。

曰く必らずしも然らず。夫れ己を愛するは己を利すると異なる、人若し全く己を愛せずんば己何に由りて立たん、一の己若し立つとなくんば何によりて獨立の人あらん、一の獨立人若し存するなくんば天下何によりて榮えん。故に人は宜しく己を愛すべし、但だ己を利せんとを欲する勿れ、肉を健やかにし、靈を硏がき、拮据黽勉して異日の大用に備ふるは能く己を愛するもの也、すでに能く己を愛したり則はち之を獻げて他の國家に犧牲にするに堪へん、之れ能く己を愛して己を利せず、所云る淸く自愛して遠く利他の業を爲すもの也。抑そも人如此にして、己を愛すると既に正し、故に亦た己を愛するの情は自然にして決して逆らふ所なし、若し人一身を利して他を顧みざるときは衷心大ひに安からざる所ろあらん、然れども能く己を愛して己を思ふときは敢て道念に於て快よか

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

らざるとを感ずるなし、是れ即はち自愛の念の正當にして且つ當然なるの證あり、左れば大聖も云へり、己の欲する如く人に施し、己を愛する如く人を愛せよと。夫れ如此にして一身を愛するは既に宜し、如此にして其一家を愛するは亦可也、彼の一國を愛するの情亦た如此くんば決して背むく所ろを見ざる也。

豈に只だ背むく所なきのみならんや、如此きは實に人情の至淸なるものにして、更に天、人に命じて人々に其固有の義務を任命するもの也。

見よ、人は方尺の地に直立すると共に其方尺の地を防禦するの任あり、其の一個の眞理を知ると共に此の一個の眞理を防衛するの責めあるに非ずや、故に一人すでに一處を防ぎ一理を衛る、此に於てか全地安く、大理進むとを得。之を以て天の人に賦するや先づ其尤も近き所ろを尤も明白に見せしめ、尤も近き所ろに尤も密切に感ぜしめ、其の遠きに離るゝに隨ひて其任とする所を疎んせしむ。目は足下に就て甚はだ明らかに、遠景に於てをぼろなり、心は近くに於て感じ強く、高遠に於て愚なり、愛は親しきに對して切に、離るゝに隨ひて疎なり、此れ豈に人をして其尤も近き所ろに於て尤も厚からしめ、其の影の映ずる所ろ、其關係の及ぼす所ろに於て、其責任を盡さしめんと欲するものにあらずや。此に於てか人先づ己を愛し、家を愛し、國を愛し、遂に天下を愛するに至る。

然らば則はち人の己を愛し、家を愛し、國を愛するは皆な其正當なる人情なり、必らずしも之を矯めんとするは則ち正當の人情を殺すもの也。人宜しく一身、一家、一國を愛すべし、たゞ其の此等を愛するに當りては常に自利を後にして利他を前にすべし、自利は喩ふるに當方に向ふの勢ほひの如し、他利は猶ほ彼方に向ふの勢ほひの如し、故に其自己、家國を愛するの時常に彼方に向ふの心を以て之を愛せざる可らず。一身を愛すると共に能く一家を愛すべし、而して一家に於けるの愛は能く一身を愛するの念を減ずべし、一家を愛すると共に能く一國を愛すべし、而して一國に於けるの愛は能く一家を利するの念を制すべし、一國を愛すると共に能く天下を愛すべし、而して天下に於けるの愛は能く一國を利するの念を減ずべし。如此く尤も近狹なる所ろに尤も愛を厚くするは人の至情にして、亦た天の妙工に成れり、但だ夫れ全躰を割りて一部分に重く任ずるの目的に出るが故に、彼の小を以て大を忘る可らず、我を以て他を忘る可らず、即はち一身を以

て一家を忘れ、一家を以て一國を忘る可らず、故に愛國の情や正々善美なり、然れども之を以て天下を忘る可らず、人類を忘る可らず、眞理を忘る可らず。

第六　愛國は愛家

故に愛國の情は猶ほ愛家の情の如し、人生れて則はち家あり、古鄕あり、此等の好樂なるホームの樂しきとは終生決して忘る可らず、其家居の必らずしも立派なるにあらず、其の山川の必らずしも美なるにあらず、只だ自然の情能く吾をして此等のホームを愛せしむる也、一國に對するの愛情亦た此に同じ。

左れば愛國の情なきものは、一は其の眼識の狹隘なるにより、一は其の利己に沒して公共の利他心なきとにより、見て以て甚はだ下賤なる如く思ハる、然れども啻に之のみにあらず、如此き人は人情常に有すべきの愛家心に乏しく、其の自然正當の優しき情愛に貧しきの故に由りて亦た賤しまるゝ也。吾人家に在るとき家の樂しきを知らず、一日旅行して薄暮客舍の孤燈に臨めば、則はち湧然として家を思ふの情起る、吾人鄕關に在るとき古鄕の樂しきを知らず、一年去つて京に登る、雁の飛び、秋風の拂ふ所ろ、何物か古鄕の天を思ハしめざる、蓋し吾人が我國を思ふの愛國心亦如此にして起り來らん、是れ自然にして万人具有の通情なり。

第七　眞正の家を愛するもの

故に愛國の情は國粹に由りて起るにあらず、實に自然の人情に由りて起る也。彼の家を愛するものを見よ、必らずしも他家に優りたるの美室あるが爲めにあらず、只だ其生來万千の感情同情に由りて結び付けられたる、一種言ふ可らざるの親味あるに由る也、故に若し一々其家居を探らば、彼の客舍に宿りて頻に泣くの旅人ハ、其家決して當夜の客室に優りたるあるにあらず、寧しろ必らずや破椽茅屋にして大ひに不潔なるものにてあるべし、然れども彼が自然なる愛家心は尙ほ彼をして其家を優りて愛せしむるなり、

百の樂しみ、宮ばしら、さまよひ見るに何ものか、
わが茅ふける家に若かん、ホーム、ホーム、ホーム、スヰートホーム、わが家の如きは他にあらじ、わが家の如きは亦とあらじ。

愛家の心豈に家粹を愛するに由らんや、只だ破れたる椽を愛する也、雨漏る屋根を愛する也、母を愛する也、妻子を愛する也、庭の枯草を愛する也、表ての小河を愛する也、何んぞ

必らずしも大ひなる美居、立派ある庭園、完全無欠なる父母妻子あるを愛するに限らんや、愛國の情亦如此し。故に日本國の美粹を製造し、日本國の短所を瀰飾し、西洋各國の長所美所を特更に無みし、如此にして初めて愛國の情ありと云ふものは、恐らく眞面目の人にあらず、吾人は日本に對して殆んど落膽し、時として失望の淵に入ることあり、而して外國の文物を見て羨やむこと甚だ切なり、然れども如此にして吾人年來の愛國情毫も減ずるを覺えず、寧しろいよ／＼與奮して大ひに勉むるの念起るを覺ゆ。

第八　女子是れ第一の愛國者

愛國心は一種の愛家心なり、故に最も能く家を愛するものは亦た進みて愛國者の最大あるものとなるを得べし。婦人は是れ家の女王なり、彼れ未だホームを愛すと云はず、寧しろ其全身悉とくホームにてある也、彼れ多くは外出するとなし、故に男性の如く家を思ふの情に於て吐露したる所ろ多くあるなし、然れども若し之をして言わしめは、女性は是れ更らに男性に優るの愛家人なり、左れば彼等亦た男性に劣らざるの愛國者たることを得べし。誰か女性に愛國心なしと云ふ、其の温たかなる情は愛の深く宿る所ろあり、若し之をして國を思ふの地に立しめば、其の國を愛するの情必らずや男性に優らん、女性は人を愛するに於て既に男性に勝てり、家を愛するに於て亦既に男性に勝てり、之よりして見んことを欲する所ろのものは、其の實に愛國の情に於ても亦た男性に優ると云ふの一事是れ也。

論説

○小說を讀む者の心得

小說は此兩三年以來大に其流行を極め或は新聞に或は雜誌に或は書物に刊其幾干なるを知らず洛陽紙價高（精妙世に賞せらるゝが爲にあらずして其徒に多きが故なり）と云へるが如き有樣なりしが明治廿二年の今日は其小說熱も彼雜誌熱の爲に少しく其勢力を奪ひ去られしにもかゝはらず此の如き題目を揭げて言ふ所あらんとするは過般世にかくれなき東京高等女學校の一件より或雜誌記者先生の女生徒德義のかく腐敗せしは全く小說の弊なりと云ふを讀み始は實に全くとは云はれぬとも多少小說も其責を分たざるべからざるを思ひ終は更に小說の害にあらずして小說の讀方を心得すものゝ皆ならんと考ひかくは思のまゝをかきしるしぬれば世の令閨令孃達よ編物又讀書の隙を以て一讀の榮を賜はらば此上なき幸なり若し此の如きことは遠くの昔より百も承知二百も合點大に御世話と仰せらるれば生の喜亦之に上越すことなしかゝる御方は「論語讀の論語知らず」とか云へる諺を身にしめて身行ひすることこそ望むところなれ

上毛伊勢崎　樂山生

「よく撰ひ讀むべかりけり世の中は人惑しの書もありてふ」と云へる道歌は千家尊澄大人の孟子の盡信書則不如無書てふ心を詠ぜられたるものにして吾人に讀書の苟もすべからざる

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ことを敎ふるや切なりと謂ふべし西諺に所謂「人の品格は其讀む處の書によりて知らるゝことも恰も其交る所の友によりて知らるゝが如し」と云へるも蓋し此意(讀書苟もすべからず)ならん吾人書を讀むに斯の如き深き注意を要すべきか。

元來人の品格は種々の外因と內因と相呼應し相合同して以て形成せらるゝものにして就中外國中其勢力を逞ふするものは敎育にして敎育中其勢力を逞ふするものは讀書に若くは莫し故に吾人の品格は其好む所の書の爲に左右せらるゝは蓋し大ならん即ち其愛讀する所孔子の書にあれば其人の品格は孔子然となり釋迦の書にあれば其人の品格は釋迦然となる其他軍談書を好むものは其品格自ら活潑となり人情本をよむものは其品格自ら浮薄となる又其好む所も其品格に似たる者にあり即ち活潑なるものは自ら軍談書を好み浮薄なるものは自ら人情本を嗜む故に佛國革命史をよむものは眼中に一の帝王なかるべく始皇本紀をよむものゝ眼中に一の自由なかるべし又眼中に一の帝王なきものは佛國革命史の類を愛するなるべく眼中に一の自由なきものは始皇本紀の類を好むなるべし此の如く其品格によりて其好む所を異にし其好む所によりて其品格を變ずるを見れば讀書に深き注意を要するは寔に肝腎の事なり。

吾人は千家大人孟軻先生及び西諺の忠切に對して深く謝する所あるべからず且つ其言ふ所を服膺せざるべからず。

以上讀書の苟もすべからざることも此の如くなれば吾人書を讀む其品を擇ばざるべからず彼の小說も亦一の書なり然らば則ち吾人小說を讀む其書を撰ばざるべからず之を讀む亦其の方なかるべからず故に是より小說の讀方について言ふ所あらんとす之を述ぶるには先ず小說の起原と目的と方法と則ち其成立を究むること肝要なり。

吾人は有形の物を見ることを易く無形の理を悟ること難し（野蠻人程從然り）人を敎ふるにも汝は心術善良なるべし品行方正ならざるべからずと唯口端のみにて敎ふると隣の阿松孃の如く心術善良なるべし向の阿花孃の如く品行方正ならざるべからずと實物を以て之が摸範を示すと其心肝に銘するの差幾ぞや蓋し其徑庭月鼈も啻ならざらん小說の起る所以は爰にあり彼の人の悟り難き理をして此人の知り易き物たらしめんが爲に彼無形を變じて此有形となすものなり小說の起原亦至美至善ならずや。

小說の起原此の如く至美至善なり而して小說の目的は如何之

を知らんと欲せば美術の目的を究めざるべからず何となれば小說は一種の美術なればなり然らば則ち美術の目的は如何元來美術の目的は人の心目を娛樂し（直接）氣格を高尙にする（間接）にあり小說の目的も蓋し此に外ならず即ち讀者をして啻に悒鬱排悶の資たらしむるのみならずかねて勸善懲惡の資たらしめんと欲するものなり小說の目的亦至美至善ならずや然らば其方法は如何生之を某先覺の士にきく曰く小說に二種あり一を想像小說（又極美小說とも云ふ生は讀者の解明し易からんが爲に積極的小說と云ふ）と云ひ一を實際小說（生は之を消極的小說と云ふ）と云ふと蓋し甲は此世に容易に得難き完全無缺の人を書き出して主人公となし讀者をして其心術の善良なると言行の端正なるとに則らしむるにありて孔子の所謂「見賢思齊」の意（往年改進新聞に載せたる照日葵中の大館主税介及絲萩姫の如き類ならんか）にして乙は此世に有勝なる不完全有缺の人を書き出して主人公として讀者をして其心術の不良なると言行の不端正を戒しめしむるに在りて孔子の所謂「見不賢内自省也」の心（先頃改進新聞に載せたる濁世中の刑部襄一⻆瀨順子の如き類ならんか）ならん即ち甲を以て勸善の目的を達する方便となし乙を以て懲惡の目的を達する方便となすものならん此解釋にして誤らずんば小說の方法も亦至美至善ならずや（小說の分類効益等は右の外甚だ多しと雖も今は唯其間接の目的をいふのみ）。

小說の起原美を極むること彼の如く其目的と方法と善を極むること此の如し此の如く至美至善なるものを以て此の如き利器を以て之を讀むもの之を用ふるもの往々不善を學び自ら傷つく亦奇ならずや是他なし唯其讀方を知らざるに坐するのみ唯其用方を知らざるに坐するのみ是れ生の私言にあらず彼金聖歎既に之を言ふ其金瓶梅の卷首に曰く「此書を讀みて人邪なる念を抱かば罪其人にありて此書の罪にあらず」と以て鑒むべきなり故に是より其讀方について聊か言ふ所あらんとす

小說を讀むものは必ず左の三件を心得べし、

第一、小說の成立即ち起原と目的と方法とを知るべき事

第二、原因結果を視るべき事

第三、事實を概括すべき事

第一は前既に述べし所なれば別に解說を要せずと雖今讀者の悟了し易からんが爲に煩雜を顧みず近易の例を以て之を言はんに元來人は每日行ふ處の目的の何たるを知るときは常に其目的を達せんとするは常情なり即ち親の爲に醫を迎へんと欲

するものゝ其道に就くや其行爲の起原(親の疾病なる事)と目的(醫を迎へて病を療せんとする事)とを知らば如何なる方法(或は疾走或は車乘等)も力を用て一秒も速に其目的を達せんと欲するなるべし小說を讀むも亦此の如し其起原と目的と方法と即ち成立を知らば必ず其目的を達せんとするや前例の如くならん是れ第一を掲げし所以なり。

第二はすべて人は事物の原因結果を見るの力なく(婦人小兒は特に然り)唯其結果のみを見て或は之を羨み或は之を恐れ或は之を倣はんと欲し或は之を避けんと欲す故に羨むべからざるを羨み避くべからざるを避く然るに今小說を讀むに當りて原因結果を視るの念を心に存せば善因あるものは善果を得惡因あるものは惡因を得「積善之家有餘慶積不善之家有餘殃」を知り小說の目的如何も始めて知るを得ん是れ第二を載せし所以なり。

第三は第二と殆んど同意義にして別に掲ぐるを要せずと雖吾人が事物を概括するの力少きは實に甚しきものあれば之を第二と別にして載せしものなり例へば赤城山(生の近所の山なる故に之を例とす)を見る人或は東より或は西より或は南より或は北より各其一方より望みて其形狀の如何を知るは敢て難きにあらざれども之を千丈の上より臨み赤城山全体の形狀如何を知るは實に容易ならざることなり西諺に所謂「楯の兩方を見よ」と云へるも蓋し此意ならん小說をよむもの若き男女の猥褻なる言行を見て此上なき快樂と思ひ己も亦之に倣はんとするが如き迷を生ずるに至るも此の概括の力少きが故なり若し此力にして足らば何ぞ此の如き迷を生ずるに至らんよし迷を生ずるも忽焉消失せん是れ第三を擧げし所以なり。

以上解說せし三件の外小說をよむに當りて注意すべき件は蓋し甚だ多からん然れども此三件は婦人小兒に頗る缺くる處ならんと信じたればかくは出せり又假令此三件にして未だ其要を盡さずとするも此三件を注意し得るものは他の諸件も充分注意し得て餘あらんとす小說を讀むもの上述の如くなれば著者の勞も空しからず自己も其眞味の如何を知りて興味百倍するは勿論身は他山の石を以て攻かれたる玉の如く社會に不道不德のもの地を掃ふて盡くるに至らん小說の効用是に至りて達せりと云ふべし。

此篇和歌を以て起したれば亦和歌を以て結ばんと欲す但し前者は千家大人の名歌にして後者は生の腰折なり見ん人一瞬を喫せば足れり(てらしみよ本と末とを思ひつゝふみのかゝみ

にうつる姿を）

終に臨み世の小說先生達を警むとは甚だ仰山なれば小說先生達に質す先生達既に「己が欲する所人に施せ」の金言にして「己所不欲勿施於人」の銀言たるを知るならん何ぞ其著述する處の金言即ち積極的小說の少くして銀言即ち消極的小說の多きや其中は人情に近からずして乙は人情に切なるが爲なるか、然らば則ち何ぞ其著述の人情に近からざる醜穢のみをかくぐるや人情に近からざると云へるは以て遁辭となすに足らず將た我國社會の道德腐敗して甲者の實口少く乙者の實口多きが爲なるか先生達は世の先進の士なり既に社會に先進の士と仰がるゝもの豈に此社交動物の特性たる自他並立心 The cooperation of self and other なくして可ならんや豈に慨嘆のみなし居りて同胞の毒害を見るに忍んや況んや其毒害を早むるに忍びんや范文正公の片時も口に絶たざる「先天下之憂而憂後天下之樂而樂」と云へる語とスペンサーの所謂「時勢より進步したる議論を普及せしむるは時勢を進步せしむる最好の方便なり」と云へる語とは先生達の胸中に片時も忘るべからざる金科玉條ならずや先生逆生を叱して咄樂山生汝何者ぞ汝天下のあらゆる小說を見たるか汝が言ふ處の如き小說は眞に小數なり汝其見る處の狹きを省みずして人を責む何ぞ汝の本分とする孔子の「躬自厚而薄責於人則遠怨矣」と云へる敎に背けるの甚しきや我輩汝に對して怨なき能はず剩さへ汝の如き田舍の自稱學者安ぞ我輩の如き都會の眞正學士の志を測り知るを得んやと仰せらるれば生は謹んで生の出過を謝し頭を抱へて兎の如く生の好樂する山中に隱遁せんのみ豈に他あらんや。

批評

(95)○我國婦人女子の地位改良を論じ　併せて歐米婦人女子の狀態に論及す　（中本一册百六十頁　定價卅五錢大成館）

此書は添田壽一氏が東京婦人敎育會、及び成立學舍女子部に於て講演せられたるものゝ筆記を、合せ出版したるものなり。第一篇には、日本婦人の地位改良方を、體力、智力、道德、世態、理財、法律、政治、の三門よりして論及し、第二篇には歐米婦人、就中英國婦人に感服する處ろ、感服せざる處ろ、及び彼等婦人に在りて我國の婦人に無き羨やむべき處ろを述べ、卷末に女子敎育上の心得五十ヶ條を附錄としたり。議論着實溫厚にして且つ綿密周到なり、固より卓出したる新論なしと云へども、其無き所ろ則はち本書の大ひに優る所ろならん、特に英國婦人が社交上に於いて勢力ある一段の演述の如きは、我國方今の讀者を益すると少なからじ。

(96)○女子の務　（中本一册二百四十二頁　定價八十錢　尙友社）

此書は獨逸の女學士ルイゼ、ブュフナル子の原著を、中川重麗氏が反譯せられたるものなり、女子敎育總論、女子の職業、家政的敎育、女子の手藝、精神的敎育、宴會社交、茶話小集、讀書、結婚、母及び妻の務、處女、女子の十二章に分かち、公平潔白に能く溫厚なる女德を敘し去りたり、譯文中例へばワルター、スコットを書名とする如き誤謬なきにあらずと云へども、概するに流暢綺麗にして間ま詩の如き所ろあり、通讀して殆んど厭くを覺えず、思ふに方今師範學校に類するほどの學校を卒業したる女學生は、一讀し置かれて然るべしと考がふ、今ま卷中の二三節を拔きて、論意及び文章の一斑を示す、

妾は茲に彼の有名なる詩人ヘルデルソンの作なるヒヘリチン(希臘神名)中の一言を思ひ起せり其語に曰く高尙なる精神は野菜を煮るが如き賤しき業を爲し能わずと想像する人に就き幾度となく吾は腹を抱へて笑ふたりヂオナマ(希臘の賢女)さへも時われば竈火の前にてまめ〳〵しく人と語れり説し天惠なる火焔を養ない且つ造化の如く人の心を怡ばしむる食物を調のふる貴き小女より世には尊ときものを育てあるなし左れば何如に高尙なる婦人と雖ども器械的の事務を執るは決して恥づべき事にわらざるのみならず此の事務は人間の大家政を理むる女子の天賦なり云々。

佳偶を得ざるの悲みは實に女性の生活の最とも悲慘なるものなり然りと雖ども此の不幸や未だ以て女性をして死なしむるものとは云ふ可からず何となれば愛は吾人本來の地盤なり吾人をして偉ならしめ華あらしむるの根本なりと雖ども愛は其範圍至つて大なり唯獨り一夫に對し區々たる夫妻の關係に於てのみ存するにわらざればなり左れば眞の愛を解せるものは夫妻の間に愛の幸福を得ざるも敢て深く憂へざるなり德の孤ならざる如く愛あるの心は鄰ありて決して孤獨とならざるなり女子は其心臟を人間社會の爲めに之を揮動せしむべし女子は天女の如き羽翼あり區々の小事に繋がれず高く飛翔して人世の爲めに一層高尙なる愛の何如を講究するこそ肝要なれ云々。

左れば宜しくマリアの如き眞女子となり其自己の竈を以て己が工場と爲し四壁寂寥の孤坐を以て寧ろ快樂の地となせるの思想を一變せしめよ女子は實に哲學と科學の兩極間に立つ精神的の關節なり理想的の代表者となり眞實的を媒介とし又美術神となり諸神の評議にも決して席を欠く可らざるものなりと云はしむるに至らんこと妾等の切に望む所ろなり云々。

筆と言論とは既に卿等に與へられたると男子と相同じ卿等人世の爲めに書くべし論ずべし敎育すべし卿等が執らざるを得ざる瑣末謙遜的の事業は是れ人世に貢ぐの租税なりと觀念せよ天帝の眼前には大なる職務も小なる職務も一樣なるぞ誠心忠實唯此の心に天は價値を置き玉ふぞ。時は既に目前に在り道は既に開けたり女子を最高の發達に導くの道は開けたり往けよ往けよ光彩ある絶高に登れ。

大畧此の類なり、以て其全豹を推知すべし。

(97)。 はゝのつとめ　大本上下二冊五十錢 定價合七十五錢丸善書肆

此の書は三島通良氏が著にして、上下の二卷に分ち、上を親

の卷と云ひ、下を子の卷と云ふ。親の卷には。懷姙の事、懷姙中養生の事、出産の事、産蓐の事、の四章ありて、之を二十七節に分ち細述し。子の卷には、人乳の事、乳母の事、母親の乳及び人工滋養法の事、分娩後初て齒の生る迄で赤兒の養育法の事、齒の生る事、生齒後の小兒の養生及び身躰に付ての手當の事、種痘の事並に小兒病氣の事、小兒身躰の發育智識の發達より學齡兒となる迄の母の務の事、の八章ありて、之を四十九節に分ち細述したり。　元來產科小兒科に關する獨逸及び本邦の大家の著書を廣く涉獵し、專ぱら淺近實用に切なる法方に適用して、方今其途に達名ある濱田玄達弘田長兩氏の校閲を經たるものなれば、說く所ろ安固にして且つ確實なり、特に文章は談話躰を用ひ、下がゝりたる所ろを巧みに言ひ流し、頗ぶる面白く且つ有益に出來たり、思ふに此類の著書にして今日迄に出版せられたるものゝ中ちにては、其第一等の仲間に入るべきものたるや疑ひなし、吾人は如此き著書の續々として世に出んことを希がふもの也。

雜錄

○古鄕を懷ふの感

一のぶ

左の一篇は余が同鄕の友某さ云へる人の但馬會雜誌なるものゝ編輯せらるゝに對して送りしものなり固より少さかの感じなれど本號の社說に由緣あるまゝ茲にも掲ぐ。

某君足下、酷暑炎熱の砌り但馬國の爲に君の深き盡力を辱ふするは生等が厚く鳴謝する所ろに候、生素と部分に局促して全躰を忘却するの宜しからざることを承はり兼てより藩閥的言行の達ならざることを覺悟いたし候に付ては地方團結鄕里盟約の如き處置に付ては必らず贊成いたすものにも無之候希ふ所は人類の文化發達に在りて萬國萬民の德善に進み候はゞ何よりとの志願に候、故に何如なる邦國何如なる種屬の人と云へども必らず此の大責任を有し只管ら身分相應の義務を盡して人間在世の目的を達し深く上帝の命に循ふべき者と決案いたし候、左れば生の眼中には西洋もなく日本もなく西洋人もなく日本人もなし尙更日本國中に於て郡縣を別にし鄕關を區する如きは頗ぶる好まざる所にて彼の慷慨を製造し悲歌を空吟して愛國者なりなど云へるものを見れば密かに同意しがたき事と考ふるものに候、然るに但馬會の組織せらるゝこと及び雜誌の發行せらるゝこと等に付て深く贊成し併せて各會員の驥尾に付て敢て之に熱心ならんとするものは全躰の大進步は切に一部分を愛護管任するに由と信ずるが故に候、家人一家を愛し、村人一村を愛し、郡人一郡を愛して茲に一國

の愛念生じ、一國の愛國心固結して万邦暴りに相侵さず則ち天下太平となるものと信ずることに候、故に但馬國出身の理學者は爲に深く研窮し、其法學者は細かく注釋し、其教育者は親しく教育し、其政治家は厚く代表し、個々切々此國の爲に盡して則はち日本全國の要務全成するものと存す、自然は吾等に家を愛せしめ古郷を愛せしめ竹馬の友を愛せしむ、生等此の自然を増飾壓滅するに及ばず乃はち自然に隨つて吾等が當務を盡すべき筈に候乎。生如此き意見を持して本會末に列するに付今ま君が熱心に此雜誌の編輯に盡力せらるゝを見て厚く鳴謝し且つ微志を錄し、但馬の爲に君に謝す、生は至つて但馬國を愛するものに候。

○婚事最とも難し　もみじ

われ今の縁談を聞くとき、身ぶるひして懼る、何んぞ其の浮薄にして輕々しきや。若し夫一人妻一人にして、夫婦は且つ死する迄で決して縁を解きがたきものとせば、世界廣しと云へども吾が連添ふべきものは只だ一人にあらずや、其人必らずしも日本に在りと限らず、況してや只だ平常交わり知れる間だにのみ存すと云ふべきかは。左るを當今の親々は何如なる心得にて斯くは大事を忽諸にせらるゝ、僅かに一二人の風評に據り、たゞ一度二度の顏見たるのみにて、早くも一生の吉凶を取極む、嗚呼天下の懼るべき事何者か之に若ん。

物を見出すと極めて難し、就中く人物を見出すに至りては最とも難し、古へより人の知り難きは賢者の尙ほ憂ひとする處ろなり、然るに僅々一二回の面識、數人の證言によりて其人と爲りを評定す、評定する尙可なり、人世何者よりも優れたるの運命を之に托す、危うきと何如斗りぞ、手代番頭を雇うすら斯の如くは容易ならじ、留守番を雇うに至りては更らに鄭重ならん、之に數十百の黄金を預けんとするに至つては更らに尙ほ鄭重にすらん、然るに家藏よりも尊とく、黄金よりも大切なる愛孃を嫁するに於て、尙ほ之よりも輕率ならば果して何如にと云ふべき。

如此きは是れ夫婦の交わりを重んぜざるに由り、又一旦結びたる婚縁の決して解く可らざるものたるを知らぬに由る、若し夫れ不都合ならば離縁を乞ひ、更めて何處にか嫁せしむべしと思ふときは縁談の事別に六かしきに非ず、然れども如此きは決して道德高き、親切厚き、思慮深き親々の爲すべきとにあらじ。而して當の孃君が唯々として之に屈從せらるゝに至つては更らに悲しむべし、驚ろくべし、歎くべし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○天眞爛熳

みどり

飾りたるが美くしきか、眞實なるが美くしきか、思ふに假令ひ樣々の瑕は見ゆるとも、彼の眞實にして自然の儘なるに越ゆるなし、左れば文章に於ても詩歌に於ても、古來尤も喝采せらるゝものは即はち尤も飾りなきものなり。彼の辭を練り句を鍛へて漸やく仕上げたるものは、一見殆んど眼を眩するに足れど、嚙嚼するに溫厚の味ゐなし。代々の歌集を讀むに讀み人知らずと云ふに秀句多し、此れ興に迫まり偶然に詠出でたるものにて、常の作者は寧ろ左程に感ぜざりしならん、西洋に於ても彼の有名なるスヰートホームの詩、又はマーゼールの詩など、誰が作りしと確定したる記錄すらなし、或は云く、ハワードペーン、ホームの詩を作りたりと、然れどもペーンは後ち乞食流浪し、或る溫たかなる家の門外に立ちて、冬の夜る家孃が此曲を彈ずるを聞き、初めて其自作の大ひに賞賛せらるゝを知れりと、又チウ、リスル、マーゼールの曲を作れりと、然れども彼れ追はれてアルプス山上に逃れ、忽まち野夫の之を吟ずるを聞きて其の世に持囃さる尋常ならぬを知れりと。此傳にして若し眞となさば、古來の秀歌多くは偶然に成る、天眞爛熳として反つて味ひあるものなり。

○定家卿秀逸

古人の心ばかりかたきものなり定家卿の

あまの原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

の歌は一代の秀逸なるよしなり。此歌養和元年の百首の内にておなじ時の

冬來てはひと夜ふた夜を玉篠の葉分の霜の所せきまで

の歌などは千載集に入られたるを天の原の歌は新古今にも洩れて自撰の新敕撰に初めて入たり其集の風躰に取捨あるにやおろかなる心にも玉ざゝの歌などよりはすぐれて見ゆかし。此歌此卿二十歳の時なり又

あけばまた秋の半もすぎぬべし傾く月の惜しきのみかは

の歌は後京極のいまだ左大將にておはしたる時の月五十首のうちなれば是も定家卿殊にわかき時なり。此歌天の原と一双にいふ歌なるが通茂公などは猶あけは又の方すぐれたる樣にのたまへり。是も新敕撰に初めて入れりおほくは若き時に秀逸はあるものなりといへり年寄りぬれば根氣おとろへて秀逸までの案情いたらざるにや此道を修する人年わかきほど怠たるべからず。（鄰女晤言）

○奪胎　南仙子

歌道に古きを取る事あり例へば、

なほざりの小野の淺茅に置く露も草葉にあまる秋の夕暮

（淺茅生の小野のしの原忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき）是れ本歌なり、

名とり川春の日かずはあらはれて花にぞ沈む瀬々の埋木

（名取川瀬々のうもれ木あらはれていかにせんとかあひみそめけん）是の如し。

俳諧にも句兄弟と云ふて古き句の心を用ひ姿のみ變へて詠む事あり。例へば、

鹽鯛の歯ぐきも寒し魚のたな　芭蕉

聲枯れて猿の歯白し峯のつき　其角

又

人の親のからす追けり雀の子　鬼貫

雀子を集へもどしけり人の親　丈馬

漢詩英詩に於て見るも往々斯る事ありてもし前者と變りて更に一双の璧とも見らるゝならばとがむべきにあらず。小説に於ても斯の如く其磧は西鶴を學び一九は喜三二慈悲成を窃ひ馬琴は水滸三國志に倣ひ春水は京傳に摸する處あるも各々學んでさらに一派をなしたる事例へば應擧が四條を脱したるが如ければさまでに責むべきにもあらず。唯姿をも心をも少しも變へずに其まゝ奪ふて我もの顏なすこそ憎き事なれ。

○四大奇書　ふ、ち、

唐山の四大奇書を三國志演義水滸傳西遊記金瓶梅となすは誰も知れり又誰人の云ひしか我國の四大奇書を八犬傳田舍源氏梅暦膝栗毛とせしは面白けれど此撰者深く我小説を渉りしものなるかいぶかし。もし長きものが優るなりと曰へば此四書こそ適當なるべけれど左にあらずと曰へば大に説あり。八犬傳は百六卷にして我國小説の最長き物語なりと雖とも後半は殆んど見るに足らず、馬琴の傑作は却て三十卷位のもの（弓張月南柯夢の類）にあらん。田舍源氏は頗る佳作にして合卷物には是に次ぐものありとも思へねど種彦の作にはまだしも優れるあらん。梅暦は春水の傑作なれども辰巳の園を除きては見るべきにあらず。膝栗毛は元々黃表紙の趣向を借りたるものにて尊ぶに足らず（一九の傑作は野郎玉子巫山之夢等あらんか）。われの考にては次のものこそ四大奇書と曰つて可ならん。

通言總まがき　山東京傳

男色大鑑　井原西鶴

娘節用　曲山人

（曲山人の作娘節用を除きては見るに足らず其力天淵の相違あるに似たり頗る疑ふべし）

狂言　作者不詳

凡て小說類に取るべき主要のもの三あり。一に情をうがちしもの二に文に巧なるもの三に趣向の奇なるもの、此三者にして共に備はりたるものあらば絶世の名作なるべけれど古今未だ是れあらず。情をもて優れるは三馬京傳、文をもて勝れたるは西鶴其碩、もし趣向をもて曰へば日本にては兎にかく馬琴あらんか。

○少壯の作　楠露老人

詩文歌曲等は刻苦に依りて力を增せど大抵は天才にありて少時の作に傑出のものある事多し。山陽が蒙古來の詩を作りしは十八歲なるが樂府中第一あり。カムプベルのPleasure of Hope は二十二歲、バイロンの Childe Harold は二十六歲、キーツのEndymion は十八歲なりし。今の文界に浮ばるゝ方々いづれもお年若と聞けば未來に天才の例に引かれ給はん。少壯に傑作ありて年よりて研磨すれば愈々艶ありと申すにはあらず。是も老人の心配、悪くお聞かれぞ。

○何節も聞あきたと聞けばドウモ大盡らし

茶屋の女房座敷へ出でもしお客様いゝ義太夫が出ましたお呼被成ませぬかと云へばイヤ義太夫も聞きあきましたさやうあら豐後もござりますイヤそれも聞あきましたソレ〳〵小玉をよふ遣ひますこはいろをお呼び成ませそれも聞あきたと何をすゝめても聞た〳〵と云ふ故此客余程の先生定めて家持の旦那であらふと思ひしに船宿に聞ば湯屋の伴頭。

○龜は番人

大勢あつまり島臺を見てなんとあの松は何の生れがはりであらうと云へば、あれは高砂のちゝいさ竹は「あれは虎の生れ替りさ鶴はどふだ鶴は仙人といふから仙人の生替りさ龜は「あいさァ番太郎でがな有ふよなぜ龜ばかり安くしやると云へば「それでも龜ゝばんにん。

○孔明の知惠

舊冬は大の不しまつ段々の瀨で大敗軍所をおれが知惠を出した。どうした。聞きやれ懸取ども大軍を以ておしよせた處をおれが屋根へ上つて琴を弾じた。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○石橋がお前丸出し
今度富十郎が石橋を致しますがおかみ樣お前にしやうでござります。おれに似たとはきりやうか。いへ〳〵。風俗か。いへ〳〵。どこが。髮の赤い處が。

兒籃

○駱駝乘亞利の話し

みち子

夜どうしミーキアイをつれて漂泊ひしアリーは夜の明くるころだん〳〵とつかれて參りました太陽は沙漠の彼方より熱と光りをそろ〳〵烈しく射出しまするとアリーわもう非常につかれて仕方がわりませんけれども父や母のことを考えて勇氣を出だし進める丈けわと進みました、太陽が登るに從て熱さが強くなり熱さが強くなるあつさが強くなるに從て喉わます〳〵かわひて來ます併し水つぼにわもう一雫の水もわりませんもはやこれ迄とアリーも覺悟をきわめました駱駝と申す獸わ妙なもので遠方よりよく水の香を嗅ぐ事が出來るのださうデス亞利を乘せたミーキアイわ何ものにか氣附し樣子にて以前のよわりしさまにひきかえ頭を擡げて走せいだしましたアリーわ前の方を見わたすに遙か彼方に椰子の木立が見えるようデスミーキアイわます〳〵走ります軈て椰子の木立に近づき見ますればこれぞ沙漠中にての樂園とも申すべきオーセスと申す場所で椰子の果もわり水も流れて居りますアリーわ天にも登る心地してミーキアイの背より飛び下りまして先づ水壺のうちへ水をみたし自分も十分にのみましたが少し安心したために勞れも出て大層ねむくなりましたため椰子の木かげに前後もしらず打ふしました、しばらくしてつかれも少しはなをつた樣故椰子の果を取て饑を愈し四方をよく見るに今迄わ氣もつきませんでしたが近傍の草が蹈みわらされて所々に駱駝の足跡が數多ありますさてわ商隊が通つた事と見へる跡を付て行かば追附かぬともあるまじとまた〳〵ミーキアイの背に打乘り足跡をたよりに出かけました。

夕方になると遠くに火の光りがきら〳〵見え空に登る烟りも分りますこれはある商隊が夕飯の仕度に懸て居のノデスアリーわよう〳〵とその商隊に加わり今迄の困難を殘らず物語りますと大層信切に取扱ひアリーを泊所へ導ひて休ませました夜中になりました一つの商隊がスエスの方より此所へ到着しました駱駝の首に付た鈴の音にアリーわ目をさましてその商隊の摸樣を見ますと多くの人の中に忘れもしない最愛の父が

居ました。我れ知らずうれしさに帳幕のうちより飛び出して父上よく／＼と抱付きましたが父のハツサンも其の奇遇に驚き先つものは涙のみですそも／＼これ迄アリーが苦心の物語を聞てこの勇ましき子を持た父のハツサンを羨らやまぬものわありません、アリーわ父と諸共無事に故郷のガザへ歸へりましたが彼の不信切なる商隊の成れる果ては知る者がありません多分わ沙漠の中に漂泊て渇て死せしやも計れません。

史傳

○チヤアレス、ヂツケンス傳（其五）　ふ、ち、

ヂツケンスが著作の年歴は概ね前の如し。誰なりしか氏を以て三馬に比せしが左もあらんか。

我が小說界は未だローマンスを脫せず、今日に於てすらローマンチツクの脚色は常に多數を制し批評を試むものすら大抵は唯此點にのみ偏してキヤラクターの如何を見るものなし。種彥馬琴等孰れもローマンチツクを以て江湖の一粲を得たるに獨り京傳と三馬は不思儀にもキヤラクターを吟味したり。三馬には小說らしき小說はなく其著書十分の八までは四十八癖の類に止まりしかど性情を寫すに巧なりし事は京傳を除きては及ぶ者なかりし。然れども主として偏癖の人物を撰みし故往々讀者の笑を買ひ。讀者も是をもて滑稽的となし一九鯉丈等と仝視するは誤れりと云ふべし。

ヂツケンスもそれと仝じくアービングの筆を學び「ロデリツク、ランドム」或ひは「ピカア、オブ、ウエークフヰルド」を愛讀し、スコツトの著書世に行はるゝ中に大胆にもリアル主義の書を著はし頗るキヤラクターに意を用ひたれど好んで偏癖の人物を撰み、往々讀者をして抱腹せしむる事あれば一二の著書を讀んで彼はユーモアに長ぜりとなすは頗る誤れりと云ふべし。「ピツクウオツク、ペーパース」は氏が最も滑稽に力を悉したるものなれば是一書をもて氏が著作の代表者となせば或はかゝる評も出べけれども全躰より觀察すれば氏が最も得意とするは寧ろ悲慘憂愁にあり、例へば「オールド、キユリオシチー、シヨツプ」に於ける幼なきチルが辛酸勞苦若くは「ダビツド、カツパーフヰールド」中のダビツドが刻苦經營の如き其細微にして心の底の底までも到たれるはスコツト、リツトンに見るべからず。三馬は元より脚色の才なく少壯の作には往々悲慘を主眼とせしもあれど馬琴種彥等に及ばざりしが偏癖の人物を寫すに巧妙なりしは客者評判記或

は噓計を見ても容易に知らる、唯ヂッケンスの如く憂愁の筆に乏しけれど「マーチン、チヤッズルウヰット」、「バーナビー、ラッヂン」、「オリバー、トウヰスト」、「ドンベイ、エンド、サン」等の各書に散在するプリッグ、タップレイ、カトル、ブンスビー、ピプキン、ツードルス、ブッンバー等に類する人物を巧みに描寫せしは京傳と雖ども一歩を讓るに似たり。かゝれば三馬はヂッケンスの大筆に劣る事万々なりと雖も彼が才筆縱横なりしはよし憂愁の分子を缺くも我國のヂッケンスと曰て不可なからんか。

ヂッケンスを我文學界に紹介せしは春の屋主人なり。主人が曾て國民之友に寄せし嗜好書目の中にサカレーあつてヂッケンスなしと雖も主人が作はサカレーと曰はんよりは寧ろヂッケンスに近く彼の書生氣質の如きある人は「ヴアニチー、フエイア」に對照せしかど其類するは共にNovel without Heroなるのみにてキヤラクターと云ひ文脉と云ひ疑ひもなきヂッケンスなり。其他妹と背鏡松之内こゝやかしこ等の諸編のキヤラクターは大にヂッケンスに類し文章の如きも脉は八文字屋にして字句は也有に似たれどヂッケンスの分子を含む事最も多し。

サカレーは當時ヂッケンスの最強競爭者にして文章は縱横自在、殊にサタイアに巧妙なりしはヂッケンスにも勝りしがキヤラクターの撰み方に於ては猶ほ及ばざりき。我國にて三馬は四十八癖客者評判記一盃綺言浮世風呂等を著はし又京傳は總籬絹篩繁々千話等を作り共にあまねく人間の情を穿ちしが更にヂッケンスの諸作を繙けば万種各様の情一層の深きを效す。世間幾多の心理學者刻苦呻吟して晦澁の文字を列べてメンタル、フアカルチーの不思議を説く、ヂッケンス彼自身は輕快に説去て笑謔解頤の中に其妙を收む。

ヂッケンスに惜むべきは其交を厚ふせし人々を遠慮なく描寫せしにあり。リアルを主とすれば往々此弊に陷り易しとは曰へ、平生往來して時には食卓を共にする知人の言行を直寫して憚からず、甚しきは「ピックウヰック」中のドクトル、スランマーの如く現在血肉の緣ある人を描きしもあり。是等は文學者——就中小說家の不德とも云ふべく大に嫌ふべくヂッケンスの大筆すら猶ほ惜しむべきに今の小說家中ヂッケンスを學ぶと否とを問はず現在の人を——一層甚しきは事實を寫して憚り貌なるは何故ぞ。

千八百六十七年ヂッケンスは再び米國に遊び前より一層の厚

待を受け到る處衆人歡呼して迎へ禮遇讌さゝるなし。ニューヨーク、ジョアナルは報じて曰く氏は英國に於てもかくは知られじ、氏が作りし一言一句をも金玉の如く尊ぶ無數の人衆の中にてよく多年を樂ませし人に會ふて其談話を聞かんと熱望するもの既に數万人あるべく一度は反對して毀罵せしも二十五年の歲月は能く此世評を移せりト。氏は歸英の後健康常ならず醫師の勸告にて著述をも怠たりしが千八百七十年六月八日ガッドシルの食室に坐せし時遽かに中風を起し廿四時間の後翌九日夕六時終に歿す。倫敦の各新聞紙特に大活字をもて「チャアレス、ヂッケンスの死」と不幸の文字を書せし時は各人皆愕然として讀書を廢し手工を休め、如何にしても信ぜられぬなどかたみに罵りあひしが漸く其信なるを知りて皆蕭然として暗愁に沈み、親疎故舊を問はず常は氏に反せし人々までも袖に雫を催し文界は頗る燈光を失ひたるが如く上パルモラルより電音をもて吊詞を發せられしめ皇陛下より下は此大著述家が常に力を盡して內地の勞役者を保護せしを尊とく覺へし職工に到るまでいづれの社會を論ぜず皆偉人の死を悲みて暗涙にむせばざるはなし。數日を經て後タイムス記者は曰く「ウエストミンスター寺院は英國希代の文學者が安息塲となれり、凡そ此地に神聖の塵灰を埋め碑に大名を記すもの多けれどチャアレス、ヂッケンスよりも尊きはなく後來氏の如く時すぎて愈光彩發揮する名譽を得るものはあらじ」と。ヂッケンス歿する時年五十八。

（完）

余が此傳を草せしはヂッケンスの大名譽の如くなるにその著述の一斑だに知る人少なければ唯その略を記して世間に告ぐるのみ、猶ほ詳細を知らんとせばフオースター氏のヂッケンス傳を讀むべし。氏の作を味はんにはまづスケッチを讀み然るのちピックウ井ック及びオール、キュリオシチー、ショップに移り最後にダビッド、カッパーフ井ールドを玩味すべし。

小説

○冷熱記

北邨俊士錄

第四章　夜の露

雲井が歸りしのち、余は鬱々として樂しまず、再たびテーブルに向ひ茫然としてありしが、妻が可笑し氣に下婢と談しするに聞惚れ、知らず〳〵して心地快活となれり、大凡そ妻が憂ひに沈むときは余れ思わず爽かになり、余が例の如く憂鬱に落つるときは妻殊の外活潑となり、彼此れ自づからになぐさめて常に悲しみの極に耽るとなし、是れ何如計りの幸福ぞや。

左れど翌る日も思ひ出せり、其翌々日も思ひ出せり、雲井が素振たゞならざりしは何事かあるなり、彼れ若し國を愛するの至情に迫りて慷慨禁じがたく、多感の激する所ろ寧しろ靜かなる處ばかりを亂して、所云る直情徑行を國家の大事に適用せば由々しき事なり、前日退去せられたる多くの面々も固より僞わりならぬ憂國者には相違なけれど、雲井にして若し彼等の仲間なりせば遺憾無上と云ふべし、前日其の幸わひにして厄を免かれたるは、朝に有識の具眼者あればなり、然るに今日依然彼退去者に往來して一層危險なる言行など示さんには、彼と云へども亦直ちに同じき運命に會ふべし、あな心憂き事哉、之と悟らば過る夜更らに嚴しく諫めたらんものを、今となりては尙ほ物足らず覺えぬ。

憂ひ、憂ひを產むか、抑そも憂ひ、憂ひを見出すか、心ろ一憂あれば尙ほさま〴〵の憂ひ來るなり、雲井が尋ね來し日より中か三日を隔てゝ、九月六日七日の頃なりけん、麗子孃より

妻の許に長々しき手紙參りぬ、余れにも見せ相談くれよとの書添ありしとて、余れ亦た其文を見たり、辭ば最と悲しく、切なる愛紙面に溢れ、所ろ〳〵のにじみたるは涙を落せしにやあらん、余れ得て輕々しく通讀すると能わざりき。

其文面によれば、昨夕、たそか彼かと見まがひ、左あきだに物の哀れに感ぜらるゝ比ろ、雲井飄然として孃が許に來りしよし、久しく訪問れせざりしゆえとて、孃が喜こぶと大方ならず、定めし恥かわし氣にもあり、憐れし氣にもあり、飛立つ思ひにてもあり、心を靜めんとする樣子にてもありつらん、余れ能く其の時の樣を想像するなり、然るに雲井は何故か常よりも沈み勝ちにて、例の遠慮なき風情さらに無く、辭ばづき嚴粛にてよそ〳〵しくせり、故に孃は何事か其心に障りしならんと思ひて、取分け温たかに持成せば雲井は更らに落附かざる顏付なし、時には沈默し、ため息し、突然語ばを發して琴を彈ぜんとを所望せしとか、其時孃は定めし想夫戀の曲をや奏でつらん、彼所の障子を半ば開らき、古風の燈しを左手に向けさせ、聲麗らゝかに歌ひつゝ、巧妙の手を盡し玉ひしならん、思ひ遣るだに最と奥床し、其の時雲井は悲に堪へず、腰なる笛を拔取りて之に合せたるよし、古るき物語に左樣の佳話多しと云へど、當夜の景色は夫にも越して、一層に美くしかりけん、いよ〳〵なつかし。

扨て合奏も止み、夜も初更となり、四面さらに物淒びしくありしころ、雲井は少さか申したきとありとて侍女を次の間に立たせ、肅然襟を正しうして孃に告げたるやうは、抑も余れ不肖の身、一介の書生なるに、甚たく松平氏の知を辱けあふして、御身と終生の約を結ぶに至りつるが、只だ徒ほ約束の上にして未だ伉儷の緣を遂ぐるに及ばねど、御身すでに余れに心中の心を與へ、余れ亦た靈中の靈を呈し、たとひ何如なる困苦ありとも亦た此の交わりを解くべしとは思わざりしが今日に至りて兼ねての素願を破ぶるべき事出來しぬ、其は何如やうの事にて何故へ御身と此迄に結びたる愛情を斷ねば成らざるやを明言し難し、御身が聞たしと思ひ玉ふよりも余れが言ひたしと思ふの念反りて切ならんと考ふれども、今日亦た別に言ひがたきの事情ありて夫をしも聞え難し、只だ御身が余れに於けるの信は世の尋常婦人の信にあらず、余れが御身に許すの誠とも亦決して輕薄男子の思ひにあらねば、互ひに相信ずるの心を以て終りに至る迄で信じたし、左らば余れが今日に至る迄で御身に盡したるの愛情は決して浮きたる

とにあらず、余れが愛すと云はんよりも余れの心中は悉とく御身に於けるの愛なりしとこそ云はめ、夫は恐らく御身の悟り玉ひし所ろならん、然るに余れは今ま此の命ちにも均しき愛情を斷ち、一生の至樂を殺ろして無慘にも御身と別れんことを決心したるは、此の眞實なる愛、此の至重なる命ちにも尙ほ優れるの一大事余れを驅り迫まると思し召せ、其の何事なるやは言はず、たゞ御身が余れに於けるの信を以て之を信じ悟り玉われ、余れ御身を愛して今日に至れり、今日御身に別れんとするに臨みて何條亦た愛あらずして決心すべき、啻に余れに於けるの一大事余れを驅り迫るのみならず、御身に別るゝは實に御身を愛するの思を完うする也、古來情を矯め、言葉を僞はり、一種の敵役となりて强いて其愛人に別れたるものあり、左れど余れは一分間と云へども余が愛する人を欺むくと能はず、亦た道念に於て寸毫の間だも僞はりを言ふわたはず、左れば御身にも言ひがたきとは言いがたしと爲し、此の愛情をも斷ねば成らぬによりて之を斷たんと云ふ、御身願わくは信じて之を許し玉へと。

余れ思ふに雲井が如此く言ひ出したるは非常の苦痛にてありしなるべし、彼は其の魂しひほどに孃を愛してありしが、何事かは知らず其の大事を思ふの決心によりて之をしも忍びて斷ち切らんとなす、其心根感ずるに餘りありて尙ほ哀れに堪へず、然るに孃が彼の綿纏たる切なる思ひを斷然として決離し、心中無量の苦を現はさずして直ちに雲井の說に同じたるは、更らに驚ろくべきの勇なり、愛は勇を生じ其勇惣べての勇よりも强よしと、余れ孃の事に於ていよ／＼其眞となるを知る。

蓋し孃は雲井をして大事を爲さしめんと欲するなり、左れど其の大事と信ずるの事に於て雲井に過ちあらんかと掛念すらん、他には固より洩すべきとならねど、余れと雲井の間だを知れば、扨こそ斯くは當夜の事を記して余れの說をも聞きたるならん、妙齡の乙女にして用意の周密なると眞とに驚ろくべし。

開書

謹しんで我敬信する巖本の君
ならびに世の諸姉に伺ひまつる。

我敬信する女學雜誌記者足下妹は年尙ほ幼なる田舍育ちの者にして先の月始めて東都に出でたり未だ御相貌を拜するの榮を得さる者にて候斯る事を願ひまつるは失禮の至りなれど常に御論の高尙なる且つ仁惠深き世の妹等を扶け玉ふ御志しの厚きに感服いたし居り候故いま御目え申さんと存じ候願くは左の件を御通覽貴重なる御紙面を妹か爲惜むなく且つ御高論を示し玉はらば慈母の愛撫にまして喜び申さん願は憫れみを垂れたまへ。

妹か在國中得たる一畏友あり彼れは志高尙にして且つ愛深き性にして妹は常に姉か敎えを受けたり然るに妹か此地に來ると間もなく彼れは近親より婚儀を申込まれたり其父母は年已に廿歲に至れるを以て且つ最良の口なるを以て婚せしめんとすゝむれとも彼れは其從兄なる者に幼より此約ありしを以て母の爲めに支えられたるを以て他に良人を持つを欲せす事を左右に托して諾せさりし故に其父母は遂に妹に書を寄せてすゝめしめたり然るに彼れより左の如き返書を送りぬ

(前略)妹の從兄に於ける其未だ慈母の膝に抱かれてあるの際即ち良人の何者たるを知らさるの時既に親と親との約ありしにて彼れか實母は妹か父の姉たりしをは御熟知ならん實に妹は世に謂ふ自由結婚なる者を企てしには無之去りさて又公然と彼れに嫁せしにてもなけれとも(中略)共に書を讀み相携えて散歩し雨の朝雲の夕常に座を共にし親和したり以後成長して妹か小學の卒えりしころは既に中學に入りたるを以て前日の如く伴はさりしも常に書を往復して互に精勵後日家國の爲め盡力せんなどちかひたり當時倘ほ彼の妻として又は良人としての一種の感覺は起らさりし只無上の好友として未だ一日寸時も忘るゝあらさりし斯くて妾は十六年の間實に幸福なる愉快の月日の中に成長したり實に妹は世の不幸なる考を知らさりし嗚呼之れ前に喜ひあれは後に愛ありと謂ふ可きか此樂みは彼の良人として又は妻としての一種の感覺の起ると同時に其繼母の爲に破碎せられたりし時妹は十七才なりき實に妹は之迄の長き夢を見たると同時に妹か心中如何ありしか記して玆に至れは毛髮栗生夏尙ほ寒きを覺ふよろしく御推察あれ以後妹は前日の如く活潑ならす一事一物見るとして妹か憂悶を起さしめさるなし殆んと半ケ年間は只死を欲するの他なかりし故に世人否世人のみならす妹が父母までも或はひうかに相許せしに非らさるかをうたがひ近親の害早婚の害を諷したり世人は實に無情にも惡評者たり之れ妹か心の大なる動しさなり且つ彼れか實母亡せたるの後は到底妹か愛を全さふすべきに非らさるを覺悟したる爲め斷然前日を捨てゝ父母にそふて其の繼母の欲する所の女(即ち今彼れか家婦)を媒介し從兄には絕交も同樣さなしたり當時世人は啞然たり妹も又實に自分なからも決心に驚きし位なりし而し從兄は實に妹に親切なりし其後半ケ年間も其女を妻視せず爲めに父母をして大に不平を抱かしめ妹も又うらみを受けたり其人情實に世の男子の遠く及はさる所實に深く感泣するに堪えさりし去れと決して兩人の意撤すべきに非らされは妹は從兄に哀願し以て其中を調和したり以後已に四ケ年可愛なる兒其膝下にたわむるを見て妹も安心したる今日彼れか心情の如何は妹の敢えて關する所に非らされど以後妹は終に世の友を得を欲せす君の厚意實に感謝の至りなれとも妹か一旦冷却したる愛の熱く彼の君をして決して幸福なるホームの中にすましむる能はさる可し實に妹は其如何なる點よりさ云ふ能す我れなから呆然たる位なれとも只自然的に感染したる一種の感情は他を顧みる能はず只此上は多年の希望の如く勉學世の姉妹の爲め分厘も益す所あり且つ獨立を得んとのみ(下略)。

右は彼か返書にて其心中實に憫れむ可しうたゝ感泣に堪えす直に其父母に訟えて彼れの目的の通り行はしめんと欲したりしも若し不可(世の子たる者として又今日文明の女子の行として)なる所ならんには飽までも止どめさるを得す獨斷に及はさるに依り右記して御高論をあをき度ひたすら願上候幸に憫を垂れ御指敎あらんとを希望いたし候。

妹目下眼病にて寫字を精細にする能はす定めて御不審の處多からん御迷惑恐入り候へ共右友人の文中細所は略し大要を世に御示し下され度候。番町の寄舍にて千之。

寄書

○誤り易き言語

依田雄甫

今日我邦の文章界に於ては誠に戰國の有樣あり十人十種各其好む所の文字を書し各其欲する所の文躰を用ふ於是乎言文一致躰あり歐文直譯躰あり春水の餘流馬琴の遺音枚擧するに遑あらす余は素より其文躰の多種なるを厭へす只其文章の編纂に從はさるを怪しむのみ之を要するに各國皆其文法あるか如く我邦にも亦確然たる文法のあらさるにあらす故に邦文を屬せんと欲する者必す此文法に據らさるべからす然るに今人の文章を見るに往々然らさる者あるに似たり因て言語の最も誤りやすき者數種を揭け以て大方諸君に問ふ然りさいへとも余不才我文學に昧らし唯私意を陳ふるのみ識者之を正たす幸甚

○白皙人種　支那人「White race」を翻譯して白皙人種といふ眞に適當の譯語といふべし我邦の先進にも此字を用ふるもの少なしとせず然るに近來は皙といふ字を見たることなき學者先生の多きにや白晳といふ人多し嘗に之を其口にいふのみならず之を其書に編するに至る試みに新聞紙雜誌等を取りて之を見よ白晳と書せさるもの殆ど罕なるべし白晳とは何如なる意ぞや「白くして賢なり」といふの意か去りとは隨分無理なる熟字ならずや且つ歐人なればとて悉く賢なるにあらず邦人豈悉く愚者のみならんや然るに彼に冠するに一の晳字を以てす外人拜崇の弊亦甚しといふべし

○いちじるしき(著)　形容辭には其語尾シクキカケに轄する者とシクシキカシケに轄する者との二種あり(いちじろし)は此第一種に屬すべきものなれば(いち

じるし(いちじるく)(いちじるき)などゝこそ轉すへけれ(いちじるしく)(いちじるしき)と書したるが多くて(いちじるき)となしたるは甚だ罕なり是れ大なるあやまちならずや「いはでもしるきことなり」とこそいへ「いはでもしるしきことなり」といふ人やはある

かの老人をばあはれなる物に思ひおきて(いちじるき)さまならずさかくまぎらはしつゝ(源氏)

雲の上に思ふ心は(いちじるく)つれなき人の目にもみ江なん(躬恒)

○過去のきとしとの區別　きは「たとはも」などいへるかゝりを結びしは「そのやなん」などいへるかゝりお結ぶなり然るに今人の文辭には「余は見し」(I saw)「余は聞きし」(I heard)など用ひたるが多し是れまた誤りなり「余は見き」「余は聞きゝ」と改むべし

○過去のけりときとの區別　きはけりのつゞまりたるなりといふ人あれども是れ亦たがへりきとけりとは其用方同じからずきは對話躰にけりは紀事躰に用ふるなり續紀延喜式などを見ば更に判然たるべしこは文科大學に於て物集教授に聞きし所也

○命令言　(見よ)(爲よ)などは命令言なり去れど(行けよ)(聞けよ)などは命令言にあらずして嗟歎の辭なり命令に用ひんと欲せば(行け)(聞け)にて可なり(よ)字を添ふるに及ばず

○るとるゝとの區別　禁止を示すになといふ辭あり(問ふな)(聞くな)のなの如し之を他動辭に用ひば(問はるな)(聞かるな)といふべし(問はるゝな)(聞かるゝな)とはいふべからず然るに今人の文章には(問はるゝな)の如くに用ひたる句多し是れまた誤りなりるとるゝとは用ひ所各異なり

(以下次號)

新報

○慈善、救濟、

各地の震災、水害、胸を裂く斗りなり、上み兩陛下を始めとして、貴搢紳士女官淑女に至る迄で大ひに之を救濟せんとに力を盡され、新聞紙も、宗教家も、各地の有志者も、非常に之に贊成して共力せらるゝよし也、如此き際こそ宗教家及び婦人方が尤も多く働らき玉ふべき時也、思ふに其の慈善に厚き心腸はすでに激しく動きつらん、願くは身を起していよ〳〵救濟の方法に盡力あらんとを。

○年中の勉強時

暑氣殆んど洗ひたる如くに去り、冷氣自づから寒ます如くに來れり、一年讀書最好の時は實に此期にある也、少年の佳季一と度び去りて復た到らず、顧みて之を悔めるときすでに其人あり數子ありて最早爲ん方なきの日乍まちにして來らん、反すぐ〳〵も心を用ひて勉學せよ。

○小野小町一千年祭

小野小町の事蹟は曖昧にして分らざる所ろもあり、然し大抵今年にて其死后、一千十年を經過したらんとて、秋田神宮教會所の方々申合せ本月三十日を期して其の一千年祭を執行し、且つ追福の爲に寄都懷舊と云ふ歌題を以て四方の歌人に詠歌の短冊を募り、祭典の節其の靈前に供ふる筈のよし、固より保守復舊の餘響にてはあらんが、斯く小町女史に至る迄で追祭を受けらるゝは、偏へに女學隆盛の有難きに由ると云ふべし。紫式部も九百年となり、淸少納言も八百五六十年となれり、此等も亦た追祭しては如何ん、然しすべて追祭に歌を詠む位ひにては面白からず、夫々に多少の義捐金を集め、之を式部學資、少納言學資など稱して今の女學生を敎育するの入用に使ふなどこそ最良の方法なれ。

○佳人の擊劔

是れ亦た甚はだ宜ろし、然し寧ろ柔術、弓矢の方面白からんと考ふ、柔術は其名の示すとうり、婦人女子の嗜なみには至つて宜し、弓矢は穩當なる運動となり且つ肺を强ふするに効あり、西洋にても女生の調練、躰操等をひく〳〵に盛んとなる、願くは徒らに眉尖刀を揮ひしの昔しを棄つる勿れ。

外報

○レピット夫人　彌よ英國迄で達せられたり過日サウサムプトン禁酒會に於て同夫人を招待し極めて懇切熱心なる親睦會を催うせし由精しくサウセルン、エコーに見ゆ。

○盲女の紀念傳　彼有名なる盲唖聾の婦人ブリツジマンの傳記を作らんとて同孃の教師たりし人の娘女たるホール夫人及びエリフツト夫人が遺壽を取集めらるゝ由。

○ラマバイの女學校　に漸やく九名の女生出來たりデムモン孃と云へるが殖產科を教授せらるゝ由なるが此は印度に取りて非常の改革なりと云ふべし。

○劇場の子供　英國に於て子供を劇場に雇使するとに付きて年來幾人中に非常の反對論あるとなるが近來に至り其論勢ますく張り此頃ろ十才以下の子供を之に使用せしむ可らずとの議案を呈出したるものあり既に下院を通過したりと云ふ。

○メーブリツク夫人　英國の大問題となりし其人毒殺の嫌疑を蒙むり居たる同夫人は減刑の上へ懲役に處せられたるよし廿四日發倫敦の電報に見ゆ。

○婦人衞生會總會　去る一日に之れ有るやう前號片々欄内に掲載したるは事實行違にして誤まりさなれるに付茲ュ該全文を取消す尙ほ今月中に總會あるべき筈なれども時日未だ定まらず追て十三日の役員相談會に於て議定あるべしと聞く。

○靜寬院宮十三回忌　去る二日は德川十四代將軍家茂公の御臺所とし降嫁あらせられし和宮即ち靜寬院殿の十三回忌に相當するを以て同日は午前七時より芝增上寺の元境内なる靈殿に於て法會を執行せられたり。

○普連土女學校　同校は明治廿一年の創立にて漸次生徒の增加せしにより今度校舍を三田功運町三十番地に移し同地に校舍寄宿舍を新築し英國女敎師を增聘し懇切に敎授するよし詳くは本號の廣告を見るべし。

○支那人女子を勾引せんさす　麻布笄町に住む某省の技師某の二女は本年十二三識にて美目麗しき性なるが四五日前門外に遊び居たる處へ通り掛つたる支那人が矢庭に小脇へ抱い込み勾引せんさせしに餘りの不意にて聲も出ず只だ逃げたい一心にもがきしかば支那人も手に餘りしか途中に捨て逃げ去りしゆゑ辛くも憂き目を免れし由不都合千萬の限りなり其筋に於て嚴しく取締あらんとを希ふは勿論、人々に於ても能く用心あらまほし。

○改正中止建白　伊豫國下浮穴郡上村の醫師城隆軒氏の長女信子は條約改正中止の建白を爲さんとて目下起草中の由。

○一夫一婦建白　岡山市女子有志者四五名も亦た其建白を爲さんとし中村しず子專ぱら盡力中のよし。

○名古屋旭郞の賦金減額願　名古屋旭郞の席貸茶屋及び娼妓取締中村正平氏外一名は本年二月並に三月を以て娼妓賦金免除及び貸席茶屋賦金減額の義を出願したるに去二十六日勝間田愛知縣知事は差許し難き旨指令されたりさ。

○岩鼻婦人積德會　は去月十六日午前九時より西群馬郡岩鼻町川藤樓に於て開會し演說討論唱歌編物女禮式等ありて演題は空氣の緊要(並木せい)小害防がざれば大害至る(林つね)朋友互に相厚くすべし(前島ちよ)人は一介も非理の物を受けざらんを要す(近藤ひな)志は大にして高くすべし(根岸かと)光陰は至重の寶(佐野しげ)飢たる人に粗食なし(小林さだ)正直の德(中島つや)愚人の話(須藤もと)愛國心意を喪失する勿れ(吉村てる)等の諸子にて大に人心を感動せしめたり續て討論に移り「兒童の敎育に眞理と方便とは何れか可なるや(發題吉村てる)其の他二三の討論あり傍聽者は無慮百二三十名程にて最も盛況なりさ。　(上毛新聞)

○上毛婦人協會　去る十七日午後二時より前橋南曲輪町の杉氏方に於いて同會の第二回を開らきしが會する者三十餘名永田なつ子の「上毛婦人協會の長壽」椎名きよ子の「婦人の德義」等の談話あり其他鈴木醫師の衞生上ュ就いての講話ありて散會せしは同五時頃なりと。　(同前)

○裁縫敎授の計畫　香川郡上の村淸水長十郞の長女マス女史(二十三年)は幼年の頃小學校を卒業し其後自ら感する所ありて兩親の許を得て大坂に赴き同地のある裁縫學校に入り久しく裁縫に勉强し居りしが首尾よく同校を卒業し夫より同地川口十三番館米國人ュデーヘール氏妻ミッセスヘール女史に從ひ尙裁縫編物等を習ひ暫らく同館に止まり居りしが先頃當地に歸り來り尙來我高松の末だ裁縫業の進み居らざるを見て最早內地雜居も近きにあらんさする今日に際して洋風の裁縫毛糸の編物等は知らざるべからずさて常に家事或は務めの爲閑なき人々に敎授するの目的にて一の裁縫學校樣のものを開かんと計畫し已に其筋へも出願しありて許可の上は南新町邊に設置するの見込なりと云ふ。　(香川新報)

○外人諸氏の義氣　熊本震災に就ての慘狀を京都比叡山に避暑中なる熊本英學校敎師クラクギュリーキ諸氏の許に通知するものあるや同氏等は即夜奔走して義捐金を募集し携へて該地を出發し後又クラーク孃の三氏着熊ありて共に西山に登り處々を巡視せられ居村に至りて關谷博士に就て實側の摸樣を尋ねんとせられしも折節同博士不在なりしかば其山を下り其夕市内處々を巡視せられ小藤博士へも面會の上再び歸京の途に就かれし由因に云ふ同氏等は救護病院設立の擧あるを聞きクラーク孃の如きは自から看病婦たるを甘んぜんさ稱つて來熊せられしが市内も漸次平穩なるより一先歸京して來月早々再び來熊せらるゝ筈なるやに聞き及ぶ。　(熊本新聞)

○大坂の女子敎育　大坂に於て女子敎育を專門さする女學校は隨分夥しく先其顯著なるものを擧れば府立高等女學校、梅花女學校、大坂一致女學校、相生女學校、照暗女學校、維美那女學校等にして何れも表面は盛大に見受けらるゝも其實は甚だ不振にして學藝の進步を見ず中には衣服の競爭のみを事となす學校さへありて女學校設立の爲めに一種の惡弊を生ずるに至りたるより去る十九年高島中將、建野前知事等の夫人及び市内豪商の妻女等が主唱者さなり婦人學習會なるものを設立し女子敎育上の弊害を憋正せん事を謀りしに最初は百餘名の入會者ありて一時盛んなりしも又々衣服の競爭を始じめ漸次衰微して目下僅かに三十餘名に過ぎず殆んど維持繼續も覺束なきに立至りたるが右各校の內普通敎育をなすものは高等女學一校にして其他梅花女學校、一致女學校等は何れも基督敎、相生女學校は佛敎主義なるを以て普通敎育を施さゞるに依り幼稚園の保姆にさへ採用する事能はず又之れを望む者もなきより近頃幼稚園及び各小學校保育科の保姆に欽員を生ずるも之れを補充する事能はず大いに幼兒保育に差支へを生ずるに至りたるに依り豫て高等女學校にては右保姆養成の爲めに特に女子師範部といふを設置せんさの計畫ありしが愈々來る十月より實行する由なり。　(神戶又新日報)

◎ジョンソン孃　長らく秋田に滯在して基督敎の傳道に從事せし米國人ジョンソン孃には今度山形縣鶴岡に赴く由にて同孃知已の人々には一昨日英和學校內に送別會を開らきたる由。　(秋田魁新報)

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○女生徒募集廣告

當校今般從來ノ組織ヲ一變シ教授上學年上大ニ改良ヲ加ヘ殊ニ和漢學ノ程度ヲ進メ併セテ歴史地理物理化學博物化學生理家政育兒法等ニ力ヲ用ヒ卒業後將來社會ニ出テ婦女ノ務ヲナスニ當リ實地ニ應用スルヲ以テ養成ノ主眼トス有志ノ者ハ來學アレ
望ノ者ニハ本邦書ヲ教授ス教員西洋人四名本邦人七名九月十二日十三日ニ入學試驗ヲ行フ詳細ハ當校ニ就キ或ハ書面ニテ問合セラルヘシ

明治二十二年八月

築地新榮町三十八番館

立教女學校

生徒募集廣告

今般本科受驗科生募集候條尋常師範中學高等小學校體操教員志願者九月二十五日限リ願書差出ス可シ

本郷區駒込追分町

私立 **東京體操傳習所**

今般高等科前期普通科前期後期男女子共募集候條志願者九月廿五日限願書差出ス可シ
但兩校規則ヲ望ム者ハ郵劵四錢ヲ要ス
從前之通リ兩校ノ學科兼修スルヲ得可シ

本郷區駒込追分町

私立 **東京唱歌專門學校**

女生徒募集廣告

本館九月十日始業シ和漢學、英佛獨語、史學、普通科學、音樂、畫學、裁縫、編物等女子必用ノ科程ハ總テ之ヲ教授ス（本館規則ヲ見ヨ）寄宿舍ニハ教頭オルドリッチ孃及本邦女教師同居シ起臥出入總テ充分ノ注意ヲ爲ス入學志願者ハ願書ニ履歴書ヲ添ヘ本館事務所ヘ申込ムベシ

麹町區上六番町十七番地

開成女學館

文部大臣従二位勲一等子爵　榎本武揚公題字
○帝國大學醫科卒業受驗生　三島通良先生編述
○醫科產科婦人科教授醫學士　濱田玄達先生
○大學小兒科講師醫學士　弘田長先生
校閲

はゝのつとめ

文章は談話躰の平假名文石版木版畫入日本綴美本

親の巻（婦人懷姙より出産迄及ひ七夜中養生法凡四章二十七節）定價金三拾錢（郵税金六錢）

子の巻（小兒分娩より學齡兒となる迄の養育法及教育法凡八章五十五節）定價金四拾五錢（郵税金八錢）

婚禮の祝產見舞誕生祝の進物には此に勝る好物なし

此書は著者が我國に母子衛生法を記載したる完全の書なく稀に有之は多は衣食生活を異にする西洋の翻譯物又は專門家に非ざる人の著書のみなるを嘆し積年大學に在て研究したる實驗に諸名家の卓説を參照して編述せられたる書にて我國に雙びなき兩專門教授ハ此が校閲を爲したる上。繁簡其宜を得、取捨其當を失せず。高尚なる學理を以て卑近なる實際に徴し、平易の談話に依りて精微の意旨を明にす。との賞讚を與へられたる古今無比の良書なれば世の貴婦人方必す一部を購ひて國家を利し己を益し給へと云爾

○發兌書肆○日本橋通三丁目丸善○馬喰町二丁目島利○通塩町中央堂○本郷春木町島利支店○

遞信省認可

東京經濟雜誌

第四百八拾五號目錄

●官令(數件)●社說●高踏勇退の場合を誤る勿れ●東京三百年祭熱●論說●政論家たるは易し政治家たるは難し愛國家たるは易し政事家たるは難し●自治政研究會講義畧記●第十四回(下)地方稅の原則●寄書●社交上の制裁●雜錄●地價の修正●東京開府三百年祭●官設鐵道の拂下げ如何●後藤伯に對する大同派員の要求●伊、佛兩國本年養蠶の景況●横濱築港設計費●露、獨、墺三帝の伯林會合●本邦石炭の景況●石炭騰貴の原因●日本のブーランゼー將軍、老壯士とは誰ぞや●谷將軍●七月中紙幣流通高●東京開府三百年祭展覽會其外數件●金融及商業の景況(數件)

●定價一冊現金七錢●十冊前金六五拾錢●半ケ年分前金壹圓五拾六錢●一ケ年分前金貳圓八拾六錢●市外は一冊に付郵稅一錢增

毎土曜日發兌　八月卅一日發兌

東京京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

移轉及生徒募集

今般地ヲ三田聖坂ノ高臺ニトシ校舍寄宿舍ヲ新築シテ本校ヲ此ニ移セリ抑モ地ハ品海ニ面シ眺望佳絶空氣純潔ニシテ頗ル身躰ノ健康ニ適ス且今般規則ヲ改正シ外國女敎師ヲ增加シ大ニ授業上ニ改良ヲ加ヘタリ校舍新築落成正サニ近キニアルヲ以テ落成ノ上直チニ授業ヲ始ムベシ入學ヲ望ム者ハ郵券貳錢ヲ送ラバ規則書ヲ呈スベシ

芝區三田功運町三拾番地

私立普連土女學校

發兌

九月。七日　十四日　廿一日　廿八日
十月。五日　十二日　十九日　廿六日
十一月。二日　九日　十六日　廿三日　三十日
十二月。七日　十四日　廿一日　廿八日

定價

一冊。六錢　郵稅。一錢(但府內無郵稅)
十冊。五十八錢郵稅。十錢(同前)
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　前金拾錢　(廿七字詰)
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"Jogaku Zasshi."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six mont h *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B Hiyoshichō, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町錢々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄕區元富士町盛春堂○同本鄕區春木町二丁目解明堂○同本鄕四丁目文魁堂○横濱住吉町角田尾貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年九月五日印刷
明治二十二年九月七日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐